

氏名	志村真幸
学位(専攻分野)	博士(人間・環境学)
学位記番号	人博第384号
学位授与の日付	平成20年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	愛犬趣味の誕生 ——近代化する社会における純血と雑種の問題——
論文調査委員	(主査) 教授 川島昭夫 教授 島田真杉 教授 西山良平 准教授 松井章

論文内容の要旨

本学位申請論文は、わが国の固有の犬種であるとされる日本犬が、明治以降、日本社会が近代化したことを踏まえて、「純血種」の搜索と認定、さらには交配による改良を経た犬種の排除という手続きによって創出されたものであることを、それに関わった人々の活動と言説の分析を通じて明らかにすることを目的としている。

第1章「日本犬」の姿を求めて」では、近世以前の日本におけるイヌの種類とその系統について、歴史学や考古学、図像分析、DNA解析などによる過去の研究を整理することによって、戦国末期にはすでに洋犬の渡来、古来の日本犬との雑種化が始まっていたこと、また江戸時代には、狩犬、町犬など、生物学的特徴や生態、人間との関係を異にする多様な存在へと分化していたことを明らかにした。第2章「日本における西洋式狩猟の導入と拡大」および第3章「明治期日本の犬たち」は、幕末期における五港開港以後、日本に居住した外国人が西洋式の狩猟を伝え、それが日本における一部の貴顕に趣味として取り入れられたこと、そのため西洋式の狩猟において欠かせない猟犬の導入が開始されたことを述べている。かつその慣行が社会階層を下降するかたちで比較的幅広い階層に普及したことを、狩猟法規、狩猟手引書、鉄道案内、文学作品等の分析によって指摘する。こうした狩猟の普及の結果、在来種の日本犬が都市部において、交雑のためにほぼ絶滅することが危惧された。その危機感の中で、固有の日本犬に関する関心が芽生えたことを確認できるという。後に秋田犬と呼ばれることになる大館犬が皇太子に献上されたのも、そのような機運によってであった。

第4章「日本犬保存会の成立」および第5章「日本犬保存会と天然記念物」は、平岩米吉らによる日本犬保存会の設立の経緯と、その活動の特徴について論じる。保存会は、純粋な日本犬は、地方山間部においてのみ、特に猟犬として保存されていると考え、同様の関心から地方において組織されていた各地域の在来犬の保存会と連携しながら、より古来の形質をとどめる個体の搜索を行った。そのようにして認定された、甲斐犬、紀州犬などの在来犬は、それぞれが原始日本の犬の特徴をいまに伝えるものとして、全体が「種」としての日本犬とみなされた。それらの観察を通じて、「日本犬標準」が作成され、日本犬の「理想的」姿がその後の日本犬認定に適用されることになる。

日本犬保存会は、文部省に積極的に働きかけ、天然記念物指定を受けることで運動の普及、宣伝および制度的認証を得ることに成功した。昭和6年の秋田犬に始まり、7年間に7地域の在来犬が日本犬として天然記念物指定を受けた。この論文ではその事例研究として、甲斐犬の記念物指定にいたる経緯が取り上げられ、地方と中央における運動の実態、特に政治との顕著な関わりが詳細に示される。

第6章「狆と高安犬」は、日本固有の犬であるにもかかわらず、原始の理念的形態・性格を逸脱したものとして排除されたケースを論じている。狆は改良を重ねて日本で作りだされた品種であり、近世には座敷犬、抱き犬として珍重されただけでなく、早くから海外で「日本の犬」として飼育され愛玩された。にもかかわらず、保存会は「日本を原産地とする犬」と日本犬とを区別し、その祖先が海外から来たものとしてそれを除外する。同様に土佐犬も近代以降に改良されたものとし

て否定される。さらに純血が保たれている「地域の犬」についても、保存会会員の調査によって、優物・名犬と「主観的」に判定される個体が確認されなかったり、確認されても繁殖を見込めない場合には、天然記念物の指定対象から外し、減じたりあるいは交雑が進んだりするに任せた。その事例として高安犬の例が取り上げられる。

第7章「日本犬と戦争」は、前章を受けて政治的な言説の中で、日本犬がどのように語られたかを、日本犬の軍用犬としての利用をめぐる問題を通じて論じている。日本犬の特性とされた剽悍さや忠実さは、すべてが軍事目的へと動員される総力戦体制下にあつて高く喧伝されたが、全般的能力においてすでに軍用犬に採用されていた西洋犬に優るものではないことが当の陸軍によって証明され、現実と言説との違背がみられたとする。

第8章「ニホンオオカミは「いつ」絶滅したのか？」および第9章「ジャッカルと日本犬」は、日本犬保存会の中心的人物であつた平岩米吉と南方熊楠との間に交わされた、ジャッカルおよびオオカミを犬の起源とする説をめぐっての応酬を分析し、「起源」に対する関心が、日本犬が犬の原初の性質を最もよく留めるものであるとの想定に由来するものであることを論じている。

犬は家畜であるにもかかわらず、日本犬の「創出」にあつては、「改良」が否定され「原初の特徴」が強調された。このことは家畜をめぐるあらゆる言説においてきわめて特異なものであり、近代化・西洋化の進行が日本の在来、固有のものに対する脅威として受けとられた結果生じた、異例の反応によるものであると結論する。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文『愛犬趣味の誕生』は、わが国の固有の犬種であるとされる「日本犬」が、近代のある時期に、古代以来の日本在来の犬の残された「純血種」を搜索して評価・認定し、同時に交雑によって改良を経た犬種を「日本犬」から排除するという二重の手続きによって「創出」されたものであること、換言すれば、いわゆる「発明された伝統」の一つであることを、それに関わつた団体および個人の活動と言説の分析を通じて明らかにすることを目的としたものである。

日本における犬は、すでにこの列島へ人間の移動定住があつたときに、獵犬としてそれにともなつて生息を開始したものと考えられる。それ以降の犬と日本人との関係にはいまだ解明されていないことも多いが、文献資料や絵画資料、出土資料の分析によって、日本の犬に特定の形質的な特徴が認められると同時に、とりわけ戦国末期以降、外国の犬の導入による交雑が進んで多様な形態をもつにいたり、同時に野犬や飼犬、愛玩用の犬など、生態や飼育の目的においても多くの異なつた存在へと分化していったことがこれまで指摘されてきている。

本論文は、そのような日本の犬が、幕末の開港以降、欧米文化との接触や浸透、日本社会の近代化・西洋化が顕著に進行していくなかで、「純粋種」としては絶滅の危機に瀕していたことへの危惧と脅威が、「日本犬」の「創出」という反応を引き起こしたとする。日本の在来犬を絶滅に追い込みつつあると当時考えられたのは、明治・大正期に在留外国人から日本の一部紳士貴顕へと、さらに特権的な階層からより広範な階層へと下降的、拡大的に普及した西洋式狩獵の流行と、それに必要な獵犬の海外からの輸入、さらにそうした外来犬と在来犬との間に進む交雑であつた。

明治・大正期のわが国における欧米式の狩獵の、導入・普及は、これまで歴史学においてとりあげられることのほとんどなかつた主題であり、またその社会的影響についても閑却されてきたといつてよい。申請者は、初期の狩獵手引書、狩獵法規、鉄道案内、文学作品など資料を博搜し、従来の見解をこえて狩獵が広く普及していたことを論証する。このことは本論文の注目すべき成果の一つである。

明治末期、秋田県大館市の「大館犬」が皇太子（後の大正天皇）に献上されたことをきっかけに、「日本犬」という存在への関心が高まつたが、純粋の日本在来犬は、洋犬との交雑の進んだ結果、孤立した状況のもと、血統を厳格に管理して交配を行っている地方山間部の獵犬を除いて、すでに存在していないことが明らかになった。この時、日本犬の保存と飼育の奨励のために設立された日本犬保存会は、日本犬の保存・普及の前に、各地域にわずかに残る在来犬を搜索し、優秀な個体を認定し、「日本犬標準」を制定することで、地域の特殊性をこえた「日本犬」概念を創出することになった。

論文の後半は、この「日本犬保存協会」の活動、および協会において指導的な役割を演じた斎藤 弘、平岩米吉らの言説の分析にあてられることになる。ここで重要な指摘は、協会が在来種の搜索、認定にあつて「保存」を前提にして、その可能性が見込めない時には、「高安犬」の場合のようにむしろ排除をしていること、認定にあつて、沈着さや剽悍さなど

の精神的な基準を導入していること、そして積極的保存のために文部省による「天然記念物」指定の制度を巧妙に活用したことなどで、いずれも「日本犬」が発明された伝統であることを示している。こうして発明された「日本犬」が、初めて対象への愛着を理由として飼育する愛犬趣味を成立させることになったと申請者は指摘している。

しかし、本論文のもつ重要性はこれにとどまらない。末尾二章において指摘されるように、日本犬の保存・普及に関与した人びとの多くが、日本における狼の絶滅への関心を共有した。犬の祖先が狼であるという措定のもとに、日本犬が最も原初の特徴をとどめる犬であると考えたからである。日本狼がなお生存するものであれば、犬と交配させることで、さらに純粋な「日本犬」、すなわち原初の犬をつくりだすことができるとする計画さえあった。欧米の犬が、人工的な交配によって改良を重ね、厳格な管理のもとに「血統」を創出したのに対し、改良という過程を経ない日本犬の「純血」を賞揚しようとするれば、原初までさかのぼらざるを得なかったとするのは、卓抜した見解といってよい。ここで示された比較文化史的視角は、今後さらなる展開を必要とする。とはいえ、本論文は全体として、犬と人間の関係を近代国家の枠組みの中でとらえ、そのもつ意味を文化史・社会史的な文脈の中で位置づけることに成功しており、そのことは特筆に値する。

以上のように、本学位申請論文は、人間とその社会を環境との関わりに沿って解明することを目指して創設された人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻の理念に適ったものと考ええる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成19年12月10日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。